

D 145 女子学生の着替えに関する調査（第2報）

昭和女大短大 〇矢尻世津子 上越教育大 佐藤悦子 東京学芸大 鳴海多恵子  
 共栄海女大 共立女大 小 林 高 岡 朋 子 仙 台 白 百 合 短 大 大 鈴 木 良 子 宮 城 学 院 女 大 大 塩 谷 節 子

目的 着替えは日常的な被服行動であるが、この着替えに関する研究はあまり行われていない。着替えは、外的要因、すなわちT・P・O等に適応させるために行われるが、その結果得られる心理的な効用も、見逃すことができない。我々は、着替え行動について調査を行ってきたが、今回は、この着替えの効用に関する因子を明らかにすることによりそこに存在する心理的な効用因子について検討した。また、着替えの実態的調査も行った。

方法 女子学生 462名を対象に、質問紙法により、1989年12月に調査を行った。調査内容は、①着替えの効用（26項目，5段階尺度）②用途別服種として、通学服・外出着・ふだん着・寝衣のイメージ（SD法，20形容詞対，5段階尺度）③生活場面に応じた具体的衣服（選択肢法）等である。

結果 着替えの効用については、因子分析の結果、8因子が抽出され、主要な因子としてエンジョイ，変身願望，社会性，機能性，リラックス等があげられた。用途別服種のイメージは、ふだん着と寝衣において、平均評点の傾向は類似し、ふだん着・寝衣と通学服や外出着との差異は解放的な，くつろいだ，ルーズな，というイメージにみられた。生活場面に応じた具体的な衣服としては、ふだん着として、スウェット，トレーナー等のくつろいだ衣服が多いのが特徴であった。寝衣は、パジャマが圧倒的に多いが、スウェットも利用されていた。参考文献；1)被服心理学研究分科会 研究発表会要旨（1990年 3月）